

佳 作

平戸市 鮎川 博志

数年前の出来事だった。「リクエストの本が届きました。」との連絡を受けワクワクして図書館に向かった。受付でその旨を伝えると本を渡され「この本は持ち帰りませんので館内でお読み下さい。」と言われた。どうして？と思ったものの「はい、分かりました。」と素直に答えた。好きな時間に家でゆっくりと読みたいのにと残念に思った。ところが、このことが平戸図書館とのありがたい出会いとなったのです。貸出期間中は毎日、図書館に通い、それが生活の軸となった。初めてのことである。それで図書館の魅力をより一層改めて感じる事ができた。それまでは本を探して受付で借りる、読了し返す、それだけだった。初日、どこに座ろうかと迷いながら一番景色がよいと思った右奥の海側の席にした。海が近くに感じられ遠くに平戸大橋が小さく見えた。素敵な景色だなと思った。数日後、今度は正面奥の席で読書を続けた。その席はサムソンホテルや青洲会病院、黒子島が見渡せ行き交う白い船の波と青い海が美しい。そして、透明感のある海が追ってくるような感じが何とも心地よい。それから気分転換に館内を歩き回るようになった。正面左奥には書庫があり、その奥に細い通路を見つけた。その通路の窓側には机が施され椅子もある。黒子島が大きく見え、また趣の違った景色に出会えた。入口右側は児童書コーナーとなっている。その奥に「おはなしの部屋」という読み聞かせの場所がある。床敷の赤色が滲むような幻想的な部屋で自然の景色とは違った安らぎを与えてくれる。このような恵まれた環境の中、2週間の図書館通いは、あっという間に終わった。最後の日、初めて正面奥のガラス扉を開けて外に出てみた。船の舳先に佇んでいるような気分、そして、これから目の前に広がる大海原に乗り出していくような幸せな高揚感に包まれた。目にすることが難しい本を図書館のネットワークで読むことができたことに深謝であった。また、それに加えて平戸図書館の魅力をよく知ることができた貴重な時間でもあった。今年の夏に知人夫妻の最後の一泊が平戸となる九州旅行で再会を祝した。会食の席で都会人に対して私の拙い平戸自慢を披露した。すると、その奥様が平戸図書館について言及された。「私は旅先で、その土地の図書館に必ず足を運びます。図書館が大好きなんですが平戸図書館、大変素晴らしかったです。観光案内に名所として入れないとだめですよ。」私はうれしく、誇らしくなり時刻や天候により移ろう図書館からの絶景やライブラリーコンサート等について熱く語った。日頃から平戸図書館のおかげで生活に彩りと指針、そして、ささやかな心の糧を頂いている。本のリクエスト等の勝手なお願いに対しても司書の皆さんの「ご利用ありがとうございます」の優しい言葉に恐縮している。これからも図書館を通しての新しい本との出会いが楽しみです。開館10周年、衷心よりお祝い申し上げます。平戸図書館、万歳！